

学生寮食堂のお姉さんになりました。

あらすじ

木下蛍は、シェフをクビになり、社宅も出ることになった崖っぷちアラサー女子。そんな中開催された同窓会で、高校生当時バスケット部のエースだった日向大地と鳴海遥と再会する。酔いで自分の身の上を話した蛍が目覚めた場所は、2人が指導するN高バスケット部の学生寮だった。蛍の料理の腕を見込んだ日向は、「お前に住まいと職を提供してやる」と言っただけで学生寮の食堂調理師になるよう指名する。

横暴な日向のやり方に反発するものの、部員たちの感謝と笑顔に触れることで自分の調理師としての夢を再確認する蛍。そして言葉少なながらも気にかけてくれる鳴海に徐々に惹かれていく。

そんな中、蛍は部員たちの前で日向に堂々と口説かれ、部屋を訪れた鳴海からも「大地なら木下を幸せに出来る」と告げられてしまう。

鳴海に対する想いを確認した蛍は日向の告白を断ろうとするが、実はその告白は日向が鳴海をたき付けるための嘘だったことが分かる。その後改めて想いを伝え合った2人は、気持ちも新たに寮生活をスタートさせる。

本文

第1話

○ホテル前（昼）

『自分で作った料理で、食べた人を笑顔にしたい』

大きな夢を胸に専門学校に進学後、調理師免許を取得。

某ホテルレストランでがむしゃらに働き続け、28歳を迎えた夏。

木下蛸

（この歳にして、職と住まいと夢を失うなんて…！）

○カフェ（夕方）

橋本ナナ

「は！？ それじゃ後輩の子を庇ったせいで、蛸は仕事を辞めさせられたってこと！？」

落ち着いたカフェの空気に、高校来の親友・橋本ナナの声が響いた。

木下蛸

「はは…まあ端的に言えば、そうなるかな…？」

橋本ナナ

「ははって…急な解雇に社宅も週末に出されるとか、超ブラックじゃない！」

歯ざしりする勢いのナナに、私はむりやり笑顔を見せた。

木下蛸

「いいのいいの、あんな職場！ あのセクハラ上司にも一矢報いてやれたし…！」

橋本ナナ

「…アンタ、その性格は本当変わらないわ」

木下蛸

「性格？」

橋本ナナ

「器用貧乏」

木下蛸

（う…っ！）

ズバリ言い当てられた指摘に、心がしぼみかける。

橋本ナナ

「ま。何ならウチにしばらく転がり込んでも良いからさ」

「嫌なことはいったん忘れて、そろそろ居酒屋に移動しよ！」

木下蛭

「ナナ…」

木下蛭

(昔から本当、頼りがいがあるなあ…)

親友の心遣いに感謝しながら、私はナナとともにカフェを出た。

○居酒屋（夜）

木下蛭

(とはいえ、本当にナナの家に転がり込むわけにもいかないよね)

(ひとまずは明日不動産屋に行かないと…)

同窓生1

「木下、どうした？」

木下蛭

「う、ううん。何でもないよっ？」

木下蛭

(いけない、今は飲み会中…！)

何の因果か失業した今日は、数年ぶりの高校バスケ部の同窓会だった。

元マネージャーの私とナナ以外は全員男で、個室は活気に溢れている。

木下蛭

(久しぶりに会ったけど、みんな高校時代と結構変わったなあ…)

スーツ姿のメンバーも多く、中には妻子持ちもいる。

同窓生1

「そういや木下は今何してんの？」

(う…っ)

他意なく向けられた質問に、他のメンバーが群がる。

同窓生2

「確か木下はレストランに勤めてるんだよな？」

同窓生3

「あー。そういや昔から、木下は料理が得意だったもんなあ！」

盛り上がる光景の端で、顔をしかめるナナに苦笑を向ける。

木下蛭

(『今日失業しました』なんて、場を盛り下げるだけだもんね)

木下蛭

「はは…そうなの。まだまだ半人前シェフだけどねっ」

同窓生1

「高校ん時から言ってたもんなー。人を喜ばせる料理を作りたいって」

「夢を着々と叶えてるってことかあ！ いいよなあ〜！」

木下蛭

「…っ」

木下蛭

(夢…か)

浮かべていた笑顔が自嘲に変わり、徐々に顔を俯けてしまう。

木下蛭

(みんな、どんどん変わっていったのに)

(私は…何にも無くなっちゃった…)

就職当初のキラキラした思いが喉に詰まって、鼻の奥がつんとなる。

橋本ナナ

「蛭っ」

木下蛭

「ごめん。ちょっとトイレ」

木下蛭

(ダメだ。こんな時に、飲み過ぎるんじゃなかった…っ)

急に緩みそうになった涙腺に、私は慌てて席を立つ。

何とか笑顔を保ったまま、個室を出ようとした一…その時。

木下蛭

「きゃ…っ！」

ドン！

扉を開けた瞬間、目の前を塞いでいた人影に私はそのまま衝突した。

木下蛭

（涙が…！）

ぶつかった衝撃で、堪えていた涙がポロリと床に落ちていく。

木下蛭

（だ、大丈夫。みんなには見られてな…）

？？？

「いってーな」

？？？

「大地、いきなり立ち止まるな」

木下蛭

「っ、え…」

見上げると、2人の男の人が立ちふさがっていた。

木下蛭

（すごい…美形コンビ）

1人は、見るからに自信ありげなやや吊り目の男の人。

もう1人は、静かな眼差しに陶器のような白い肌の男の人。

木下蛭

（…あれ？ この2人、見覚えがあるような…）

同窓生1

「おおっ！ 日向（ひゅうが）と鳴海（なるみ）じゃん！」

同窓生2

「来れないんじゃないのかよー！？」

同窓生3

「確か2人とも、同じ高校のバスケ部で監督とコーチをしてるんだよなあ！？」

木下蛭

（日向と、鳴海…？）

賑わったメンバーの声に、酔った頭が急速に回り出す。

日向大地

「はっ。お前らリーマンと違って、強豪校の指導員はそう暇がねーんだよ」

同窓生1

「っかー！ テメー相変わらずの横暴君主っぷりだな！」

鳴海遥

「大地、とりあえず早く中に入れ。狭い」

同窓生2

「鳴海のクールビューティーっぷりも健在かよ。むしろ磨きがかかってねぇ？」

木下蛭

(日向大地と鳴海遥…そうだ、この2人)

(バスケ部で、1年からレギュラーだった…)

日向大地

「んで？」

ぐっと見下ろされた吊り目が、立ち尽くす私を見据える。

日向大地

「何泣いてんだ、お前？」

鳴海遥

「大地」

木下蛭

「ッ！」

木下蛭

(ああ。そうだ)

(こいつ…昔からこういう空気読まない奴だった—…！)

橋本ナナ

「ちょ…、蛭！？ しっかりして…！！」

ふつりと意識が途切れる間際、

ナナの叫び声とともに、誰かの逞しい腕が私を抱き止めた気がした—…

○学生寮・主人公の部屋（朝）

木下蛭

「っ、ん…」

木下蛭

(頭…痛い…)

寝返りを打った瞬間、ズキリと鋭い頭痛に襲われる。

木下蛭

(ああ、そっか。昨日は同窓会で飲み過ぎて…)

木下蛭

「う…とりあえず水を…、あれ？」

起き上がった後私は、辺りを見回す。

布団もベッドも他の家具も、全て私の部屋のものだ。

木下蛭

(それなのに…何だろう。この違和感は…?)

妙な感覚を抱きながら、ひとまずカーテンを開けてみる。

木下蛭

「…は!？」

木下蛭

(目の前にあったコンビニ…いつの間にか森林になってる!?)

窓の外景色は、昨日までとはまるで違うものだった。

ごしごしと目を擦るも、光景は変わるわけもない。

???

「起きたか」

木下蛭

「きゃあっ!？」

急にかけられた声に、思わず悲鳴を上げてしまう。

扉から顔を覗かせていた人物は…。

木下蛭

「な、鳴海君…っ？」

鳴海遥

「悪い。驚かせた」

木下蛭

「う、ううん。それはいいんだけど…」

木下蛭

(どうして、鳴海君が私の部屋に…！？)

混乱と焦りと警戒心で、胸がバクバクと騒ぐ。

鳴海遥

「具合は大丈夫か、木下」

木下蛭

(う…っ)

(鳴海君のしっとりした声…昔とちっとも変わらないや)

眉目秀麗、文武両道。

彼のためにあるような言葉だな、と常々思っていたものだ。

鳴海遥

「水を持ってきた。飲むか」

木下蛭

「あ、ありがとう…？」

言われるままに喉を潤しながらも、いまいち状況に着いていけない。

木下蛭

「あ、あの…鳴海君。昨日はいったい…」

日向大地

「お。やーっと起きたのかよ？」

木下蛭

「ぎゃあ!？」

鳴海君の後ろから現れたもう1人に、私は再び声を上げた。

日向大地

「は～…朝っぱらから色気のない声だな、お前」

木下蛭

「ど、どうして日向君まで…！」

周囲の布団をかき集め、後ろの壁まであとずさる。

冷や汗をかく私をよそに、日向君がニヤリと不敵に笑った。

日向大地

「木下。お前、昨日仕事をクビになったんだろ？」

木下蛭

「な…！」

鳴海遥

「大地。せめて言葉を選べ」

鳴海君が制止するも、私は開いた口が塞がらない。

日向大地

「社宅も出て行くハメになって、絶賛絶望中…なんだろ？」

木下蛭

「な、なんでそこまで…！！」

鳴海遥

「昨日、木下が自分で話してた」

(さ、最悪だ…！！)

燃えるように熱い顔に、1人一生禁酒の誓いを立てていると…。

日向大地

「俺たちが、お前の住まいと職を提供してやる」

木下蛭

「……」

木下蛭

(なんですと?)

○学生寮・食堂(朝)

階段を下りて連れて行かれた先は、覚えのない広大な食堂だった。

男子高生1

「あ。おはようございます！ 監督、コーチ！」

男子高生2

「おはようございます！！」

日向大地

「おう」

鳴海遥

「朝から元気だな、お前らは」

木下蛭

(な…何なのこの子たち。高校生、だよな…?)

食堂にいる大人数の男子高生と、2人はさも親しげに話している。

木下蛭

(いやいや！ それ以前にここはいったいどこ!?)

(私の社宅じゃないの…!?)

日向大地

「おーし。N高バスケ部！ こちらに注目ー!!」

混乱する私をよそに、パン、と日向君が手を鳴らす。

食堂の若い喧噪が一瞬で静まった。

日向大地

「コイツが、新しく入った食堂のおねーさんだ」

「早速今日の昼食から作ってもらうからな」

木下蛭

「……」

木下蛭

(はい?)

ぼかんとする私の前で、男子高生たちが弾けるように沸き上がった。

男子高生1

「うっおー！ マジっすか!?!」

男子高生2

「いやったー!!」

男子高生3

「これで鳴海コーチのしょっぱい料理とはおさらばだー!!」

鳴海遥

「…悪かったな。しょっぱい料理で」

小声で毒づく鳴海君に、自然と口が緩みそうになるが…、

日向大地

「と、いうことだ」

「木下。お前は今日から、この学生寮の食堂調理師になれ」

木下蛭

「はああっ!？」

木下蛭

(何がどうしてそうなった!!)

仁王立ちの命令に声を上げると、鳴海君がすかさず私の隣に立った。

鳴海遥

「俺らが指導してるN高バスケ部は、原則寮生活なんだけど」

「前の調理師が、急に辞めることになったんだ」

木下蛭

「あ、え…っ」

丁寧な説明に逆に困惑していると、鳴海君が耳元でそっと囁く。

鳴海遥

「だから…木下みたいな人、ずっと探してた」

木下蛭

「…っ」

かち合った透き通るような綺麗な瞳に、ドキンと胸が高鳴る。

木下蛭

(お、落ち着け私! 顔を赤らめるな…!)

日向大地

「ったく。昨日もちゃんと説明して、お前も了承してたんだぜ」

「だから昨日中に業者に頼んで、お前の家の物を全てこの寮の空き部屋に移しておいた」

「これからはここが、お前の自宅兼職場だ」

木下蛭

「人が酩酊している間にいったい何をッ!」

日向大地

「はっ。どうせ行き先もないんだろーが？」

木下蛭

「う…っ、そ、それは…!」

にやりと笑う日向君に、ぐっと口をつぐむ。

日向大地

「っつーわけだ。ウチの寮生52人の朝昼晩のメシ作り、しっかりやれよ」

鳴海遥

「おいお前ら、この人に迷惑をかけたら外周だからな」

男子高生一同

「うーっす！！」

木下蛭

「『うーっす』じゃなーい！！」

私の悲痛な叫びは、若人の盛り上がりにかき消されてしまった。

こうして、私の新たな生活が幕を開けたのだ……。

第2話

○学生寮・厨房（昼）

木下蛸

「ど、どうにか完成…！！」

かすれ声で呟いた私は、そのままテーブルに突っ伏す。

男子高生52人分の料理は、まさに体力勝負だった。

木下蛸

「ビーフシチュー、サラダ、デザート…有り合わせだけど、ひとまず平気かな」

木下蛸

（レストラン勤務の時も量はあったけど、その分人手もあったもんな）

（思えばお皿洗いだって、職場では久しぶりだった気がする…）

部員1

「あー！ 今日も疲れたー！」

部員2

「日向監督マジ鬼畜！ 鳴海コーチ激ポーカーフェイス！」

部員3

「っていうか、うわ！ むちゃくちゃいい香りしねえ！？」

木下蛸

「う、わ…っ！」

○学生寮・食堂（昼）

どどっと押し寄せる男子高生の波。

汗まみれの彼らは、満面の笑顔を浮かべていた。

部員1

「こ、これっ、頂いても良いッスか！？」

木下蛸

「ど…どうぞ！ 好きなだけ食べて良いからね…！」

部員2

「よっしゃー！ ありがとうございます、木下さん！」

部員 3

「どれも美味そうだー！！」

木下 螢

「…ふふ。しっかり嚙んで食べてね！」

嬉しそうに昼食をほおぼる姿に、胸がじんわり温かくなっていった。

○学生寮・厨房（昼）

部員のみんなが、満足げな顔で食堂を後にした。

木下 螢

「わかってたけど、食器もすごい量…」

日向 大地

「おー。やってるか、新人」

鳴海 遥

「…腹減った」

木下 螢

「あ…日向君、鳴海君！」

厨房に顔を出した2人に、私は濡れた手を拭いて駆け寄った。

木下 螢

「2人も食べるよね？ 今温めるから、ちょっと待ってて」

日向 大地

「朝は文句タラタラだったわりには甲斐甲斐しいな」

木下 螢

「いちいち鼻につく言い方するね」

とはいえ、言葉とは裏腹に口元に浮かぶのは微笑みだった。

木下 螢

「…私ね、レストランにいた時は料理ばかりだったんだよ」

「少しでも早く料理の腕を上げたいって、必死になって」

日向 大地

「そりゃ当然だろ」

鳴海 遥

「……」

温め直した皿を差し出ししながら、私は苦笑する。

木下蛸

「料理ばかり見ていて…食べる人の笑顔を見ること、もうずっと忘れてた気がする」

日向大地

「……」

鳴海遥

「…でも、思い出した？」

木下蛸

「うん」

鳴海君の問いかけに、私は笑みを返した。

木下蛸

「部員の子たちは、みんな素直でいい子ばかりみたいだし」

「ここに来られて良かったって思えてきたよ。不本意ながらね」

日向大地

「そりゃそうだ。俺らの可愛い選手たちだからな」

誇らしげに笑った日向君が、すごい勢いでシチューを平らげていく。

木下蛸

(そういえば高校の合宿でも、こんな風に料理をかき込んでたっけ)

思い出し笑いを浮かべる私に、日向君の動きがびたりと止まる。

日向大地

「…何笑ってんだよ」

木下蛸

「ふふ。別に？」

不機嫌そうな眉に見て見ぬ振りをして、私は残りの食器洗いに戻った。

○学生寮・食堂（夜）

木下蛸

「あれ…鳴海君？」

鳴海遥

「木下、まだいたのか」

夕食後の誰もいなくなった食堂に、鳴海君が書類を抱え姿を見せた。

木下蛭

「朝食の仕込みをしてたの。鳴海君は…資料整理か何か？」

鳴海遥

「半分は夏期講習の課題作り。俺らは教員とコーチの掛け持ちだから」

木下蛭

「わ、そうなんだ。鳴海君も本当、昔から努力家だったもんね」

鳴海遥

「……」

木下蛭

「え？」

目を瞬かせた私の頭に、おもむろに鳴海君の手が乗った。

ひどく優しい撫で方に、私は頬を熱くする。

木下蛭

「な…鳴海君？」

鳴海遥

「努力家なのは、木下の方」

木下蛭

「え」

鳴海遥

「今日の夕飯の時だって、部員の名前と好みを細かく記録してただろ」

木下蛭

(み、見られてたんだ…！)

思わぬ指摘に、ドキリと心臓が鳴る。

鳴海遥

「木下も、昔と変わらない」

木下蛭

「う…、何だか、それはそれで複雑だよ」

照れ隠しも兼ねて告げた言葉に、鳴海君は一瞬の逡巡をみせた。

鳴海遥

「じゃあ…言い方を変える」

「その真っ直ぐなところは、昔と何も変わらない」

木下蛭

「…！」

突然向けられた柔らかな笑顔に、胸が甘く締め付けられる。

木下蛭

(鳴海君の笑顔を見るのは、これで2回目だ)

彼は、高校時代から感情を表に出さない人だった。

だからこそ昔1度だけかいま見た笑顔が、忘れられなくて—…

木下蛭

「…鳴海君こそ、ちっとも変わってないよ」

鳴海遥

「…？ 何か言ったか」

木下蛭

「っ、ううん。コーヒー淹れるねっ」

そそくさと厨房に向かう私は、

いまだ胸の鼓動がドキドキと鳴り止まらずにいた—…

○学生寮・食堂（昼）

部員1

「木下ちゃんってさ、彼氏とかいるの？」

食堂のお姉さんになってから半月後。

食堂でだべっていた子の1人から、無邪気な質問が飛んできた。

木下蛭

「な、何それ…っ？」

部員1

「いやー、料理もうまくて気遣いあっていつも笑顔でさ」

部員2

「木下ちゃんって監督やコーチと同じ年なんでしょ？ だったらもういい歳じゃん？」

木下蛭

(う…っ!!)

子供たちの期待の視線に、私は顔を引きつらせた。

木下蛭

「ふっふっふ…残念ながら。私みたいに頑固で無鉄砲な女は、なかなか買い手がつかなくてね～」

現に失業したのも、感情任せに上司に嘔みついたからだ。

木下蛭

(思えば色恋沙汰自体、就職して以降全く縁がなかったような…)

部員1

「じゃあさ！ 日向監督と鳴海コーチなら、どっちが木下ちゃんのタイプ!？」

木下蛭

「…はいっ!？」

予想外の質問に、思わず声を張り上げてしまう。

部員2

「日向監督も鳴海コーチも、イケメンのくせに浮いた話は聞かないし」

部員3

「2人はデキてるんじゃないかって噂もあるくらいで～」

木下蛭

「え」

木下蛭

(日向君と、鳴海君が…?)

強引な日向君に、冷静な鳴海君が困惑しつつも受け入れる。

なるほど、確かにそういう想像が不可能なわけでもない。

木下蛭

「ぶ、はは！ 確かにあの2人、昔から性格真逆なわりにツルんでたからなあ～。案外当たってるかも…」

???

「…へえ？ 何が当たってるって？」

木下蛭

「……」

瞬間、目の前の子たちも、揃って顔を引きつらせる。

木下蛭

（こ、この声は…！）

日向大地

「随分楽しそうだなあ？ 俺も混ぜてくれよ」

木下蛭

「ひ、日向君…っ」

背後で仁王立ちする日向君に、みんなすっかり顔面蒼白になっている。

日向大地

「お前もだ木下。誤解招く発言してんじゃねーよ」

木下蛭

「こ、これは大変失礼しました…！」

ジロリと睨む吊り目に、私も慌てて頭を下げた。

木下蛭

（ちょっとおふざけが過ぎたか…！）

日向大地

「俺の恋愛対象は女だ。特に…頑固で無鉄砲な女がいい」

木下蛭

「……」

部員全員

「……」

ぽかんと目を丸くする私たちに、日向君がニヤリと笑みを漏らす。

木下蛭

（こ、こいつ、さっきの話を聞いてわざと…！）

部員 1

「か、監督！ それってもしや、監督は木下ちゃんのこと…！？」

部員 2

「おおー！ マジですか！！」

案の定、部員の子達は水を得た魚のように盛り上がってしまう。

木下蛭

「ちょ…日向君っ！　そういう冗談は…！」

日向大地

「冗談？」

木下蛭

「え…」

ずっと細められた瞳を見たと同時に、身体がグイッと引っ張られる。

日向大地

「俺は…嘘は嫌いだ」

やけに艶っぽい口調は、私の耳のすぐ側で囁かれた。

肩を抱き寄せられ、押しつけられるワイシャツの感触。

日向大地

「意外と抱き心地が良いな、お前」

木下蛭

「ん、な…っ！？」

強引に背中に回された腕に、私は頬を熱く燃やした。

部員1

「きゃーっ、監督もようやく熱愛発覚ッスカー！？」

木下蛭

「熱愛って、あのね…！」

盛り上がりを増す部員の子たちに、近付いてくる日向君の吐息。

木下蛭

（唇、当たる…！！）

木下蛭

「わ…っ！？」

楽しげに詰められていく日向君との距離が、唐突に離された。

力強く掴まれたもうひとつの手の温もりに、胸がドキッと跳ね上がる。

鳴海遥

「悪ふざけはその辺にしろ。大地」

日向大地

「遙」

木下蛭

「な…鳴海君…！」

鳴海君の背の後ろに庇われ、ようやく俺様の魔の手から脱出できた。

鳴海遙

「お前ら…俺は前に、彼女に迷惑をかけたなら外周だと言ったな」

部員1

「あ」

部員2

「う…！」

鳴海遙

「食堂にいる部員全員、外周30周。大地、お前は50周だ」

部員全員

「えええーっ！？」

日向大地

「何で俺もだ！！」

食堂に男たちの悲鳴が響く中、

木下蛭

(…っ)

私の手はずっと、鳴海君の手に繋がれたままだった。

○学生寮・主人公の部屋（夕方）

部屋に戻った後、私はベッドに1人倒れ込んでいた。

細い息をつきながら、右手をそっとかざす。

木下蛭

「…鳴海君の手、大きかったな」

ぼつりとこぼした独り言に気づき、かあっと頬が熱くなる。

木下蛭

(は、恥ずかしい～…っ！！)

枕を力いっぱい抱きながら、先ほどのやりとりを思い返していた。

木下蛭

「そういえば…鳴海君は昔からそうだったっけ」

誰かが本当に参っていると、いつも彼は静かに手を差し伸べていた。

いつだったか、私がひどく落ち込んでいた時だって…

鳴海遥

「…木下？」

木下蛭

「っ、え…！！」

ノック音とともに聞こえた渦中の人の声に、私はガバッと跳ね起きた。

手櫛で髪を整えると、私は急いで扉を開ける。

鳴海遥

「突然悪い。休憩中だったろ」

木下蛭

「だ、大丈夫！ ぼーっとしてただけだから…！」

木下蛭

（う…ダメだ。緊張で妙なテンションになってしまう…！）

ぎこちない挙動の私に、鳴海君はすっと目を細めた。

木下蛭

（え…）

鳴海遥

「これ。部員たちの主なデータだから。余裕があったら目を通しといて」

手渡された書類には、部員の子のデータが事細かに記されていた。

木下蛭

「あ、ありがとう！ 実は来週から、その子の体質に応じて別にメニューを作ろうかと…」

鳴海遥

「……」

木下蛭

「鳴海、君？」

鳴海遥

「さっきは…余計なことをして悪かった」

木下蛭

「え？」

何を言われているのかわからず、私は目を瞬かせた。

鳴海遥

「大地は…バカで強引で向こう見ずだけど、不誠実な事は絶対しない」

木下蛭

「あ…」

鳴海遥

「アイツならきっと、木下のことを幸せにできる」

鳴海君の言わんとしていることが見え始め、胸が鈍く軋んだ。

木下蛭

(それって…)

鳴海遥

「それだけだ。…それじゃ」

木下蛭

「っ、ちょ、ちょっと待って…！」

とっさに服の袖を掴んだ私に、鳴海君がはっと振り返った。

木下蛭

「鳴海、君…」

鳴海遥

「——…っ」

木下蛭

「きゃ…！」

かすかに見えた彼の苦しげな表情。

次の瞬間、私は彼の腕の中にぎゅうっと閉じこめられた。

逞しい鳴海君の感触に、心臓が激しく飛び跳ねる。

木下蛭

「…っ、鳴海、君…？」

鳴海遥

「……」

緊張に小さく震える声に、鳴海君はそっと離れていく。

鳴海遥

「ごめん」

小さく謝罪の言葉を残した鳴海君は、

今度こそ振り返ることなく、私の元を去っていった。

第3話

○学生寮・厨房（夜）

その日の夜。

みんなの夕食が終わった後、私は一心不乱に食器を洗っていた。

木下蛸

「よし！ 後は明日の仕込みをして、来週のメニューを考えて…！」

口にしながら、テーブルに残ったままの料理に視線を留める。

あの後1度も姿を見せない彼を思い、私はため息をついた。

木下蛸

（鳴海君…今日は食べないのかな）

夕方の鳴海君とのやりとりを思い出す。

熱く巻き付いた腕の感触が、今でも身体を離れない。

ピリリリッ、ピリリリッ…

木下蛸

「うわ!？」

突然、机の上の携帯が音を奏で出す。

表示されている名前に、私は急いでボタンを押した。

橋本ナナ

『おーい蛸！ 元気にしてる?』

木下蛸

「ナ、ナナ…!？」

この学生寮で働きだした日に、ナナには電話で説明をしておいた。

その後は時折LINEで連絡を取るくらいだったけど。

木下蛸

「ナナ！ ちょうどいいところに電話を…！」

木下蛸

（この混乱を頭に熟成させていたら、明日の朝食の味付けに影響が出かねない…!!）

ワラをも掴む思いで、私はナナに今日の出来事を説明した。

○暗転

○学生寮・厨房（夜）

橋本ナナ

『なるほどねえ…それで蛍は、2人の男に迫られ悩んでいる、と』

木下蛍

「そ、そんなんじゃないってば…！」

橋本ナナ

『それで？ 蛍はどっちの元エースに恋をしてるわけ？』

木下蛍

「んなっ!？」

突拍子もない質問に、私はとっさに人気がないのを確認する。

木下蛍

「どっちも何もないよ！ 放っておいても相手が見つかりそうな2人に私なんか…！」

橋本ナナ

『ふふ。確か高校時代にも聞いたわ、その台詞』

木下蛍

「え…」

橋本ナナ

『それも日向君と鳴海君とのことで、ね』

ナナの指摘に、私ははっと息をのんだ。

木下蛍

（そうだ…確か、女の先輩に2人との仲を質問された時に…）

橋本ナナ

『あの時の蛍は、結局うやむやにしちゃったけどさ。今なら、違う答えを出せるんじゃない？』

木下蛍

「…っ、ナナ」

橋本ナナ

『それじゃ！ いい報告を待ってるよっ!』

木下蛍

「あっ、ちょ…！」

プツッと切られた電話に、私は途方に暮れてしまう。

木下蛍

「今なら…違う答えを…」

か細い眩きが、1人きりの厨房に小さく響いた。

○暗転

橋本ナナ

「…もしもし？ 私だけ」

「蛍のこと、どうやらもう一押しみたいだよ？」

○学生寮・主人公の部屋（夜）

朝食の仕込みを終え、部屋に戻ると一…

日向大地

「おー。遅かったな、木下」

木下蛍

「何で人の部屋に堂々と入り込んでるのよ日向君っ！！」

ベッドに無遠慮に腰を下ろす日向君に、私は声を張り上げた。

日向大地

「俺はこの寮の管理責任者だからな。マスターキーを持っている」

木下蛍

「それ、職権乱用でしょ！」

日向大地

「遥と何かあったか」

木下蛍

「え…っ」

大きく目を見張った私に、日向君はニヤリと口元を上げた。

日向大地

「練習中も上の空、夕飯も姿を見せないときたら察しはつく」

木下蛭

(す…鋭い…！)

後ずさりする私に、日向君が優雅に立ち上がる。

日向大地

「遥とは長い付き合いだからな。お前に対する想いもある程度把握してるつもりだ」

木下蛭

「な、な、何を…！」

日向大地

「でも、問題はそこじゃない」

すっと伸ばされた手が、私の髪をさっと耳にかける。

木下蛭

「っ、や…！」

日向大地

「…お前、マジで無防備だな」

ぼそりと耳元に落とされた言葉に、かあっと身体が熱くなる。

日向大地

「お前が、俺と遥のどちらを選ぶのか…問題はそれだけだ」

木下蛭

「な、何で、そんな…！」

日向大地

「言っとくが、俺は気が長い方じゃない」

ククッと短く笑った日向君は、呆気なく扉に足を向けた。

日向大地

「一晩考えさせてやる。よく考えるんだな」

木下蛭

「ひ、一晩って…ちょっと！」

日向大地

「明日の朝食は、遥も連れていく」

木下蛭

「…！」

鳴海君の姿を思い返し、胸がぎゅっと苦しくなる。

そんな私にふっと笑みを浮かべた日向君は、そのまま部屋を後にした。

木下蛸

「…何なの、それ…」

急速に力が抜けた私は、ぼすんとベッドに倒れ込む。

天井を眺めながら、私は長いため息をついた。

木下蛸

「ナナも日向君も…まるで全部見透かしてるみたいに…」

木下蛸

(…ううん、違う)

(本当は私も、ちゃんとわかってたんだ)

高校時代の合宿で、初めてみんなに食事を作るようになったとき。

ナナも私も必死に作ったけれど、最初からうまくいくはずもなくで。

木下蛸

(ようやく納得できる食事ができた日、鳴海君が、)

(『ありがとう。美味しかった』って、初めて笑ってくれたから……)

痛いくらいに締め付ける心に、たまらず目をつむる。

木下蛸

(あのことがあったから…私は将来の夢を持てたんだ)

(あれからずっと、私は……)

10年越しの恋心。

今になってようやく、向き合うことになるなんて。

鳴海遥 (回想)

「木下みたいな人、ずっと探してた」

木下蛸

「…っ、鳴海君…」

するりと口からこぼれた愛しい人の名は、

1人部屋の夜に静かに溶けて消えていった……

○学生寮・食堂 (朝)

日向大地

「で？ 答えを聞かせてもらおうか、木下」

木下蛭

（ちょ、直球キタ——！！）

穏やかな朝食の一時が、監督の一言でビリリと緊張に包まれた。

幸いまだ鳴海君の姿がなく、私は慌てて日向君の元に駆け寄る。

木下蛭

「え、ええっと日向君。その話はちょっと向こうで…！」

日向大地

「ここでいい」

木下蛭

「いや、でもみんな聞き耳立ててるし…！！」

日向大地

「ここでいい」

木下蛭

（こ、この横暴男～…っ！）

肩で息をする私に、日向君は不敵に笑った。

日向大地

「一言答えれば良いだけだ。俺を選ぶのか、遥を選ぶのか」

部員 1

「おおっ！？ これはつまり！？」

部員 2

「マジで木下ちゃん争奪戦が勃発していたわけッスねー！？」

木下蛭

「ちょ…みんな違う！ 違うのッ！！」

一気に盛り上がる部員のみんなに、私は首がもげるくらいに横に振る。

木下蛭

（日向君ならまだしも、鳴海君にまで迷惑をかけるわけには…！）

木下蛭

「え、ええっと…！」

意を決した私は、ぐっと顔を上げ日向君を見据える。

高校時代の自分が、直視できなかった想いを一緒に。

木下蛭

「わ…私は、その、日向君の想いには…っ！」

???

「一…、待て」

木下蛭

(え…)

気付けば私の口は、大きな手のひらに覆われていた。

木下蛭

「な、鳴海君…っ！？」

鳴海遥

「…木下」

肩越しに見た鳴海君の姿に、一気に心臓が騒ぎだす。

熱のこもった眼差しを注がれ、私の勢いは完全にしぼんでしまった。

木下蛭

(で…でも昨日、自分に正直になろうって決めて…！)

鳴海遥

「俺は…お前が好きだ」

木下蛭

「……」

木下蛭

(え—…っ)

振り返ると、そこには初めて見る彼の表情があった。

鳴海遥

「大地なら任せられると思った…けど、それはただの虚勢だ」

「大地じゃなく、俺を選んでほしい」

木下蛭

「…っ」

沸き上がってくる激しい感情に、自然と涙が滲んでしまう。

木下蛭

(わ…私も好きですって、言わなくちゃ…っ)

胸がいっぱい、うまく言葉が出てこない。

そんな私に、鳴海君の顔がわずかに陰りを見せた時—…

日向大地

「—ははっ！　ようやく言えたか。この恋愛不器用男が！！」

半端な空気を一掃する大声が、食堂に響いた。

鳴海遥

「っ、だ、大地…！」

部員1

「きゃああっ！　鳴海コーチが女性に告白するなんて！」

部員2

「しかもあんな必死な顔を見せるなんて！？」

部員3

「やっば鳴海コーチも人の子だったんツスねー！！」

木下蛭

「あ…ちょ…！」

瞬く間に波及したお祭り騒ぎに、私も鳴海君もぼかんと立ち尽くす。

日向大地

「あとは、お前の答えを伝えてやれ、木下」

木下蛭

「ひゅ、日向君…！？」

日向大地

「俺たちは、親友の長年の片想いを成就させてやりたかっただけなんでな」

木下蛭

「俺…たち？」

意味深に笑う日向君に、私たちは揃ってピンとくる。

木下蛭

「も、もしかして、ナナもこの件に絡んで…！？」

鳴海遥

「大地、お前が昨日、木下に告白したってわざわざ報告に来たのは…っ」

日向大地

「まーまー。俺が嘘は嫌いなのは本当だけだよ」

いまだ盛り上がる子たちを背景に、日向君がここ1番の笑顔を見せる。

日向大地

「嘘も方便、だろ？」

木下蛭

(この…俺様…！)

どうやらこの方にはこれからも、頭が上がらないこと確定らしい。

○学生寮・鳴海の部屋（朝）

その後、私は手を引かれ、鳴海君の部屋に連れていかれた。

シンプルでモノトーンが多い部屋に、妙にドギマギしてしまう。

木下蛭

「な…鳴海君っぽい部屋だね。はは」

鳴海遥

「…木下」

木下蛭

「…っ」

少しかすれた声色に、下手な笑い声も溶かされてしまう。

真っ直ぐな瞳がとても綺麗で、私はぼうっと見惚れてしまった。

鳴海遥

「突然、こんなことになってごめん」

木下蛭

「え…」

鳴海遥

「でも…止められなかった」

繋がれたままの彼の手に、力がこもる。

木下蛭

(高校時代には、こんな風に触れ合うこともなかった)

よぎった考えに、ドキンと心臓が音を鳴らす。

鳴海遥

「木下…さっきも言ったけど、」

木下蛭

(もしかしたらこれが…本当に最後のチャンスなのかもしれない)

(鳴海君と真正面から向き合うことのできる、最後のチャンスなのかも…)

木下蛭

「わ…私ね！ 私…っ」

気付けば私は、鳴海君の手をぎゅうっと握り返していた。

木下蛭

「鳴海君のことが…すごく、好きだよ…！」

鳴海遥

「…っ！」

咳を切ったように、ようやく言葉にすることができた思い。

木下蛭

(何でだろ…気持ちと一緒に、涙まで出てくる…)

目尻に潤みが集まるのを感じ、私はぱっと顔を俯けた。

鳴海遥

「木下」

木下蛭

「ご、ごめんね。ようやく伝えられて…何だかホッとして…っ」

鳴海遥

「…っ」

一瞬、鳴海君の赤くなった頬を見たかと思った瞬間—…

木下蛭

「っ、あ…！」

熱い腕の中に抱きしめられ、私の心臓は一気に騒ぎだす。

おずおずと腕を回した私に、鳴海君の肩がピクリと反応した。

鳴海遥

「…蛭」

木下蛭

(な、名前呼び…！)

破壊力抜群の声色に、顔の火照りがどンドンひどくなる。

鳴海遥

「俺と…付き合ってほしい」

木下蛭

「う…は、はい…っ」

鳴海遥

「顔上げて」

言われるままに顔を上げた私の唇に、

鳴海君は優しく撫でるようなキスを落とした…

○学生寮・食堂 (昼)

部員 1

「蛭ちゃん！ 今日のご飯は何ー？」

部員 2

「今日の晩飯は何！？」

部員 3

「ついでに鳴海コーチとの仲はどうー？」

木下蛭

「こらっ！ どさくさに紛れて何聞いているの…！！」

賑やかな食堂に、もはや恒例となった質問が飛び交う。

部員 1

「だってあの鳴海コーチとお付き合いなんてさー」

部員 2

「ちゃんと甘い言葉を言ってもらってるのかなぁー、とか？」

部員 3

「キスとかしてるのかなぁー、とか！？」

日向大地

「もっと先までいっちゃてるのかなぁー、とかな！」

木下蛍

「ちょ…、何をさりげなく混ぜてるの、日向君ッ！！」

ニヤニヤと笑みを浮かべるみんなの勢いに思わず後ずさってしまう。

木下蛍

「も、もう！ いいからみんな、さっさとご飯を食べなさ…、」

鳴海遥

「——お前ら、どうやら外周し足りないようだな」

地を這うような声に、浮かれた空気がさっと静まり返る。

部員1

「な、鳴海コーチ…っ！」

鳴海遥

「ここにいる部員は外周50周。日向と佐藤、お前らは60周だ」

佐藤

「ええーっ！！」

日向大地

「だから何で俺もだ！？」

大騒ぎになる食堂で、鳴海君は涼しい顔でテーブルにつく。

木下蛍

「ね、ねえ。鳴海君？」

鳴海遥

「ん」

木下蛍

「どうして日向君だけじゃなくて、佐藤君まで60周って…？」

鳴海遥

「……」

置かれた昼食を前に、鳴海君の瞳がさっと逸らされる。

鳴海遥

「…あいつ最近、蛍のことを名前で呼んでるから」

木下蛍

「…え」

鳴海遥

「いただきます」

黙々にご飯を食す鳴海君を前に、私の頬にはじわじわと熱が集まってくる。

でもそれは、鳴海君も同じようで……

日向大地

「お？ なーに2人でトマトみたくなってんだ？」

木下蛍

「ちょ…日向君っ！！」

鳴海遥

「大地、お前はやっぱり70周」

日向大地

「いやいや！ さすがに死ぬだろ！！」

部員の子たちの笑いに包まれる食堂で、

私はまだ始まったばかりの新生活に心温まるのを感じていた……

終